

厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）  
分担研究報告書

インターネットを利用した子どもの事故情報の収集と啓発

主任研究者 田中哲郎（国立公衆衛生院母子保健学部）  
研究協力者 小林正子，（国立公衆衛生院母子保健学部）

研究要旨：小児の事故防止対策として、インターネットを利用した事故情報の収集や啓発が今後必要であり有効な方法であろうとの考えから、昨年度より準備を行い、今年度より国立公衆衛生院・母子保健学部のホームページを開設して実施した。その内容は、①年齢別に多い事故、②応急手当、③事故症例登録、の3つから構成されている。今後は、如何に利用を活性化させるかが課題であるが、リンクを増やし、宣伝することで対応する。内容的にも一層の充実をはかり、アメリカCDCの国立事故防止センターのような役割を果たす事故防止の中心的機構の設立も考えていく必要がある。

〔はじめに〕 少子時代の今日、生まれてきた子どもを健やかに安全に育むことは今や社会の義務ともいえる状況にある。そこで、近年、活用が進んでいるインターネットを利用して、小児の事故防止対策に役立てることを目的に、小児事故に関する知識や応急手当の普及啓発と事故症例の収集を行うホームページを開設した。スタートしたばかりであるが、今後の事故対策として迅速に情報を提供・収集できるインターネットによる方法は非常に有効であると考えられ、アメリカCDCの事故防止センターのような役割を果たす機構の設立も視野に入れながら、今後一層の充実をはかっていく必要があると思われる。

〔方法〕 インターネット上の公共機関等のホームページを参考に、小児事故に関する情報提供（一方方向）と情報収集（双方向）を可能にするホームページを開設した。これは、国立公衆衛生院の母子保健学部ホームページ内にあり、<http://www.iph.go.jp>

でアクセスできる。

小児事故に関する内容は次の3つからなる。すなわち

1. わが国の小児事故の実態と防止策
2. 応急手当の方法
3. 事故症例の登録

1. については、これまでの研究により明らかにされた日本における子どもの事故について紹介し、発育段階によって起こりやすい事故について分類している。そのうえで、子どもの事故は、ある時期に集中して起こりやすいものがあるため、その時期にちょっとした注意を払えば防ぐことが可能であり、どのようにすればよいかを具体的に紹介している。

2. については、万一事故が起こった場合の応急手当の方法をわかりやすい図によって紹介している。

3. については、今までに起こった子どもの事故例についてアンケート形式で答えてもらう（表1）。これより様々な事故例を収集できることが期待され、内容を分析した後は、

ホームページ上で情報提供することを考えている。また、今後の研究にも活用することを目的としている。

〔結果〕ホームページを開設して5ヶ月ほど経った。アクセスは多いが、事故症例の収集については、寄せられた情報が11件しかなく、アンケートの取り方に問題があるのか、報告するほどの事故がないのか、あるいは宣伝が足りないのか検討中である。現在のところ、特別の宣伝もなく、リンクもない状態であるので、今後改善の必要を感じられる結果である。

〔考察〕インターネットによる小児事故についての情報提供や応急手当法の紹介は、誰でも気軽に手早く利用できるという利点がある。さらに、事故症例の収集も効率的に行うことが可能であると思われる。時代の変化と共に事故の種類も変化していくことが見込まれるため、今後、小児事故に関する啓発にも研究にも、インターネットの利用は必要不可欠であろうと考えられる。

しかし、こうした事故に関するホームページ存在することも広く知られておらず、今後は宣伝なども考えて行かなければならない。また、関係機関や小児科医などのホームページとリンクをはることも必要と考えられる。

さらに、わが国では、欧米に見られるような事故情報を提供、収集する中心的機構が存在しないため、今回のホームページの活用状況等も考慮しながら、このような機構の樹立について検討していくことも必要である。

ホームページに掲載されている「年齢別に多い事故」は、0～1歳、1～2歳、3～6歳に分類されている。その内容を以下に示す。

(0～1歳のみ)

<http://www.iph.go.jp>

## 年齢別に多い事故 (0～1歳まで)

わが国では、1歳未満の子どもが事故のために毎年300人近くが死亡しています。死亡事故1件に対して死亡に至らない事故は19万件発生していると推定されています。これらのうち1/2～2/3は子どもの回りにいる人々のちょっとした注意で防ぐことが可能です。

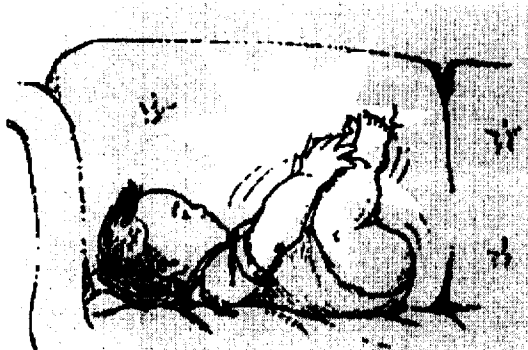
赤ちゃんは自分の回りのもの全てに興味を示しますが、危険を予知することは全くできません。赤ちゃんの事故を防ぐためには、お母さんなど子どもの回りにいる人々の気配りと家族全員が事故防止の認識を深めることが必要です。

この時期に多い事故は、窒息、異物誤飲、やけど、転落や転倒による外傷と水の事故です。赤ちゃんにとって家庭内での危険なものは何でしょうか？放置されたタバコや医薬品、テーブルやベッド、階段、風呂場、ドア、ストーブやポット、ベビーカーや歩行器などです。

- 1) 転落(ソファー・ベッド)
- 2) 窒息(ふかふかの寝具)
- 3) 誤飲(タバコ)
- 4) やけど(アイロン)
- 5) やけど(テーブルクロス)
- 6) やけど(台所)
- 7) やけど(ストーブ)
- 8) やけど(ポット)
- 9) 溺水(浴槽)
- 10) 転落(階段)
- 11) 交通事故(自動車)
- 12) 切傷(カミソリ)
- 13) 窒息(ビニール)

戻る

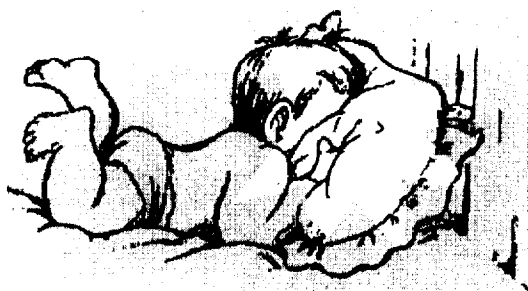
### 1) 転落(ソファ・ベッド)



赤ちゃんは成長するにつれて突然寝返りをうち、どこからでも転落するようになります。ベビーベッド、ソファ、テーブルなどの高い所に一人にしておいては危険です。

戻る

### 2) 窒息(ふかふかの寝具)



赤ちゃんが自分で重い頭を上げることができないうちは、ふかふかのおふとんやまくらも危険なもの。また、ベッドの内にぬいぐるみなどを置くこともさげましょう。

戻る

### 3) 誤飲(タバコ)



手に触れるものを口に持っていくのは、赤ちゃんの本能です。危険なものは必ず、赤ちゃんの手に届かないところに保管しましょう。赤ちゃんの目の高さで安全の確認を！！

戻る

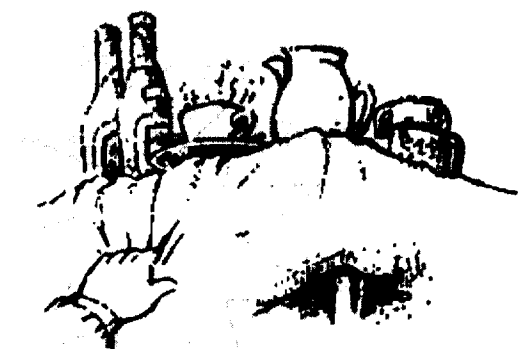
### 4) やけど(アイロン)



赤ちゃんは何でも触りたがります。アイロンをテーブルや机の端に置くのは危険です。また、コードが赤ちゃんの手に届くところにあると引っ張り危険です。

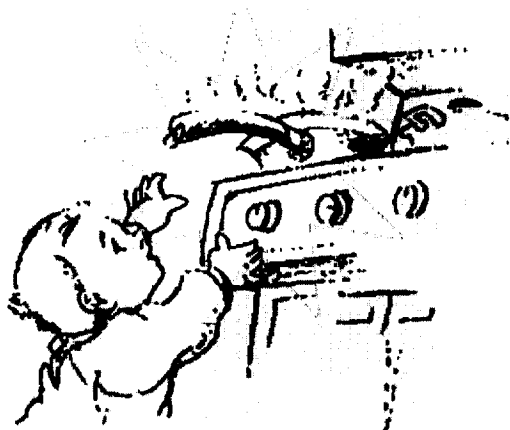
戻る

### 5) やけど(テーブルクロス)



子どもが小さいうちは、テーブルクロスの使用はやめましょう。赤ちゃんがテーブルクロスの端を引っ張ると、頭の上に食器やお湯がかかる危険があります。

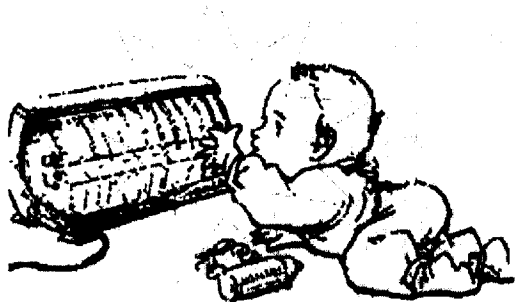
### 6) やけど(台所)



赤ちゃんは昨日まで届かなかった所に、あっという間に手が届くようになります。とっての部分に手が届かないような向きに、なべやフライパンを置くようにしましょう。

戻る

### 7) やけど(ストーブ)



熱源の直接出ているストーブは柵などで囲って赤ちゃんが触れないようにしましょう。また、ストーブの上のやかんは危険ですのでやめましょう。

戻る

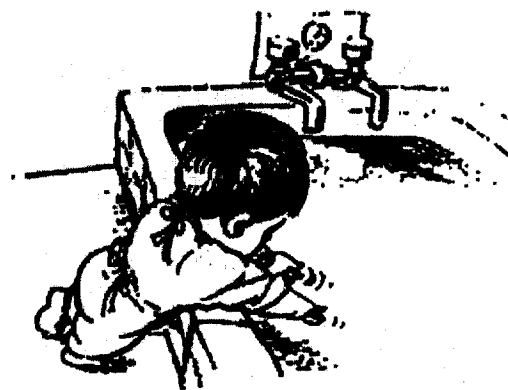
### 8) やけど(ポット)



安全ロックを忘れたり、ロックされていてもポットが倒れると熱湯が出て危険です。また、電気ポットの湯わかし中にあがる蒸気にも注意しましょう。

戻る

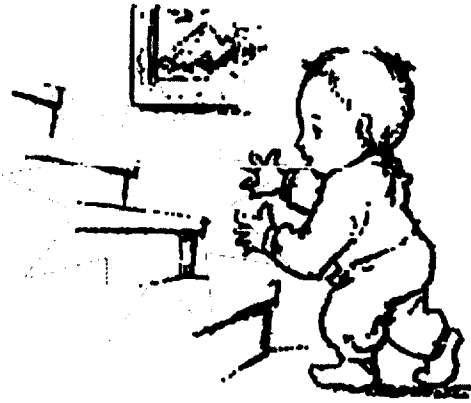
### 9) 溺水(浴槽)



日本では外国に比べて、子どもの溺死、特に家の中での水の事故が多く発生しています。よちよち歩きから2才の誕生日までは十分な注意が必要です。風呂場の戸は必ず閉めてかぎをかけ、また、残し湯をしないようにしましょう。

戻る

### 10) 転落(階段)



階段からの転落は頭部打撲や骨折など大きな事故を引き起こします。ハイハイ可能な時期までに、階段の上下に柵を設置し、赤ちゃんが一人で階段に入らないようにしましょう。

戻る

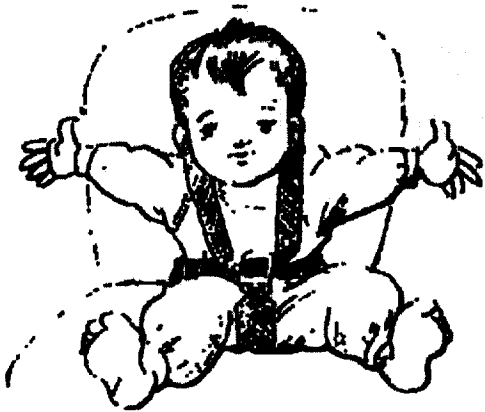
### 12) 切傷(カミソリ)



赤ちゃんはまだ、カミソリやハサミ、包丁などが危険な刃物であることを知りません。手の届くところにこれらを放置しておくことのないようにしましょう。

戻る

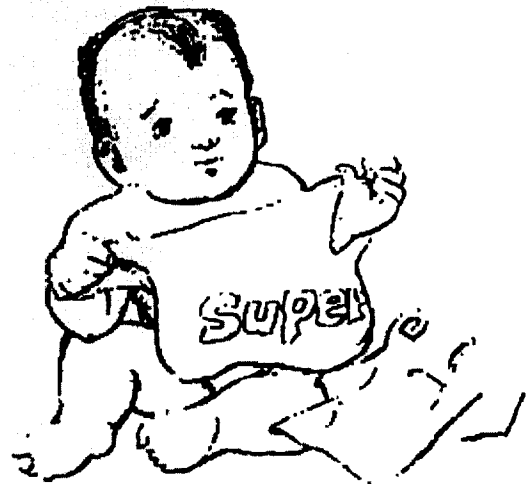
### 11) 交通事故(自動車)



車のスピードが遅くても衝突の力は大きく、大人がしっかり赤ちゃんを抱いているつもりでも、支えきれものではありません。年齢にあったチャイルドシートを、正しくしっかりと座席に固定し、使用しましょう。



戻る

### 13) 窒息(ビニール)



スーパーのビニール袋やクリーニングされた衣類にかぶせられているビニールなどで、赤ちゃんが遊ばないように、すぐかたづけするようにしましょう。

戻る

 **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用   
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究要旨：小児の事故防止対策として、インターネットを利用した事故情報の収集や啓発が今後必要であり有効な方法であろうとの考えから、昨年度より準備を行い、今年度より国立公衆衛生院・母子保健学部のホームページを開設して実施した。その内容は、年齢別に多い事故、応急手当、事故症例登録、の3つから構成されている。今後は、如何に利用を活発化させるかが課題であるが、リンクを増やし、宣伝することで対応する。内容的にも、一層の充実をはかり、アメリカ CDC の国立事故防止センターのような役割を果たす事故防止の中心的機構の設立も考えていく必要がある。